

第9回ミニ講演会 報告

日 時: 2017年3月4日(土) 10時～11時30分

場 所: 杉田地区センター

参加者: 講演会30名(S33～S58卒)、懇親会(ランチ)29名

講 師: 渡辺 京子氏(S10年生まれ、S33・文学部英文科卒)

テーマ: 「やり直したらええねん～多感な少女の眼で戦前・戦中・戦後の神戸を語る～」

内 容:

水野裕子さん(S53・社)の司会で開会。最初に高木支部長の挨拶があり、その中で昨年11月に逝去された浜屋方子さん(S41・社会学部卒、第2回ミニ講演会講師)のご冥福を祈り、全員で黙祷を捧げました。

講師登場。後ろにはプロジェクターから二歳の講師が映し出され、「今日は82歳の今の私でなく、二歳の頃の“ココちゃん”が見て感じた話です」と言うところから始まりました。

二歳の私

石炭商の父を持ち6人兄弟の5人目として、神戸市中央区栄町の商家に生まれました。日頃から兄弟や出入り盛んな大人達と交じり、蓄音機では童謡・唱歌から浪曲やジャズに至るまで様々なレコードに聴き入り、二階の子供部屋の本棚では児童書を、階下の商い場の書棚からはルビ入りの大人の本に触れました。

お向いの海鮮問屋の店先でおやつ代わりに毎日のようにホタテ・干しエビを貰い、また商いで時折訪れるおじさんが毎度くれるアイス最中、そして、近くの「モロゾフさん」の硝子瓶のチョコがキラキラした金銀の包み紙で輝いていたのを覚えています。 —ここで講師からモロゾフのチョコレートが配られました—



阪神大水害(昭和13年)

家中が水浸しになりながら窓枠につかまり、「折角や、記念写真でも撮ろか」と言ってポーズをとる人達と片や濁流の中でカメラを構える人との、あまりにも明るい笑い声が忘れられません。

戦争の足音

海岸通りの旅館に兵隊さんが大勢泊まっておられ、通りから二階に向けて「おじちゃんら、どこに行くの?」と問いかけたら「遠くだよ」と応えてくれましたが、その翌日には一斉に居なくなりました。幼いながら大陸への出征であることを知りました。「海行かば」や初代ミスワカナ・玉川一郎の万才「慰問袋」「兄は工兵」が蓄音機から流れていました。

大東亜戦争

小学入学。実家は栄町から山陽電車の西代地区に移りました。そこからは神戸の街並みがよく見下ろせました。市街地の空襲も次第に激しくなり、尼崎の空襲では学徒動員の姉が深夜、全身油だらけの姿で歩いて戻って来て、母が「ヒャー、直子が帰ってきた!」と叫び声を上げました。

学童疎開で鳥取県の三朝に。上級生でもオネシヨする子がいました。オネシヨは「心の涙」です。寂しくて何度も手紙を書きました。検閲があり、ほとんど届けられなかった様で、やっと届いた便りを見て、父が迎えに来てくれましたが、同じような境遇の仲良しの友達が「トランクに入れて連れて帰って」しがみつき、心が痛みました。

終戦と復興

敗戦による進駐軍の好ましくないデマが流れ、九州の田舎へ家族で移動。途中、新型爆

弾によって一瞬の内に死神の世界に変わってしまった広島も目にしました。九州に渡る連絡船の乗船場では荷物を置き忘れたけれど、母が一言「子供を置き忘れんで良かった」と。

復興の熱気の中で敗戦の虚脱感から荒れた元予科練生が社会問題になる中、町内会全体で「日ノ丸」で見送った知り合いのお兄さんを人々が避けるのを見て、思わず「飛行服を脱いで！」と叫びました。悲しい光景がまだ目の奥に残っています。

阪神淡路大震災

まわり皆、被災者だらけ。お互いに「へえーそう、気の毒したねえ、でも私らも同じやの」と明るく応える人々です。あの大水害の時と同じです。

神戸の街と人～やり直したらええねん

東京や大阪のような巨大な都市ではないが、山と海、温泉や神社・寺、お洒落な服や美味しい食べ物等々、何でもが身近に揃っている街。そんな神戸の街自体がそこに住む人々の「復元力」を育ててくれていると確信しております。「復元力」まさしくそれは大学時代に読んだ Hemingway の“THE OLD MAN AND THE SEA” の次の一節にも通じるものだと思うのです。‘But man is not made for defeat,’ he said ‘A man can be destroyed but not defeated.’

すばらしい記憶力と、みずみずしい臨場感のあるお話に、「第2弾として大学(関学)時代の話は是非に」と言う声が数多く聞かれました。



懇親会(ランチ): 12:00~14:00 パレドバルブ(徒歩5分)

司会は田地野幹雄さん(S58・社)。西岡睦夫さん(S33・経)の音頭で乾杯。恒例となった出席者全員の近況報告と最後は佐藤事務局長のエールで「空の翼」を斉唱して閉会となりました。

【事務局・記】

